

2014.1.12 「朽ちないパンの恵み」 ヨハネによる福音書6:1～15

ヨハネの「五千人の給食」は、他の福音書と違いを見る。先ず、時間帯の違い。他の福音書では、夕食時のことが記されている。それに対しヨハネにはない。この後の16節を見ると「夕方になったので」ということが書かれている。夕食時ではないことは、五千人の人々と“パン”を食べることが本来の目的では無かったということになる。では何が目的だったのか？

イエスは、群衆に何が必要とされているのか、そのことを知っているのか弟子を試みる。フィリポに対しイエスは問う。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と。フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。二百デナリオンとは相当な額。実際に二百デナリオンでパンを買えば十分に足りる額ではある。でも、「二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えたのは、群衆に対する本来の飢え渴きは、そんなもので満たされるものではないことを感じ取ったということかと思う。

ただもう一人の弟子は「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんな大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」とイエスの群衆に対する思い、フィリポのイエスへの察した思いをまったく感じきれないアンデレがいた。ただここでイエスは、“お前は何にも分かっていないのか”と怒ることはしない。イエスはむしろその朽ちるパンを分け合う喜びを用いて、「本当の命を与えるパン」を示された。パンを分け合う喜びは、パンが食べて無くなってもそこに残る。

マザーテレサの話。ある方からもらった小さな一袋のお米があったが、彼女はそれを半分に分けてイスラム教徒の貧しいご婦人の方にあげた。するとそのお米をもらったご婦人はすぐにそのお米を半分に分けてよそに持って行った。マザーテレサは、このご婦人にあの半分のお米をどこに持って行ったの？と尋ねるとこのご婦人は、私よりも貧しいヒンズー教徒の婦人にあげてきた。と応えたそうである。マザーテレサはそのことを聞いて、ここに神の国があると言われた。

ここにまことの「朽ちないパンの恵み」が表されている。(神谷)